特集

平成30年度　片品村景観講演会

群馬県　県土整備部　都市計画課

片品村・群馬県・群馬県都市計画協会の共催による景観講演会が平成30年12月１日(土)、片品村役場(２階会議室)で開催されました。

東京大学大学院工学系研究科教授の中井先生を迎え、「身のまわりから考える風景づくり」をテーマに講演していただきました。

中井教授

中井先生は、景観論、公共空間・公共施設のデザインとまちづくり、近代土木デザイン史などを専門にされ、主なプロジェクトには岸公園(島根県)やベレン地区公園図書館(コロンビア･メデジン市)、竹田城下町再生のまちづくり(大分県)、山中湖村のまちづくり(山梨県)など、多くのまちづくりに係る実務のほか、全国各地で景観に係る講演をなさっています。

講演会では、先生が手掛けた多くの実例を写真で示しながら解説していただきました。

その中でも考えさせられたのは、公共と個人の中間にある共同体(地域、地区、町内会など)での日常の暮らしが希薄となり、近代では、公共と個人の２極に分化したことにより、身のまわりの日常の風景をつくる主体が消えつつあるという現状です。行政機能が高度化し創り出される風景の一例として、宮城県の津波被災地の中小河川復興整備が挙げられ、コンクリートで完全に覆われた堤防は、機能としては充分であっても川との親水性が失われてしまった事例が紹介されました。また、個人主義の確立によって自由な「個」が主張し我を張りあう風景が創り出されている実例などにより、近代化した社会構造の現状を学ぶことができました。

このような背景を前提として、講演は近現代という時代の特質とパブリックスペース(地域の広場、道、川、公園など)の可能性へと展開されていきます。ここで、ベレン地区公園図書館(コロンビア･メデジン市)の事例が取り上げられ、これまでは治安が悪く自衛のために家に閉じこもっていたメデジン市民にとって、屋外のパブリックスペースは平和の象徴となり、「生きる理由や人生の楽しみは一見ありふれた日常のなかにこそある。」という日常の価値をパブリックスペースが与えることができると市民から教えられたそうです。私たちの「身のまわりの日常の価値を共有して生きるためのインフラ＝身近なパブリック」が次代のまちづくりには必要となってくることを教えていただきました。

景観講演会の様子

風景とは人々の暮らしや生き方の結果が映し出されたものであるという先生の言葉が心に残り、終始講演に引き込まれる内容でした。受講者の皆さんもとても有意義な時間を過ごされたことと思います。